



連合ボランティア派遣団出発式で、派遣者を代表して決意を述べる
JR連合井口事務局長

特集 JR連合の 東日本大震災救援の 取り組み！

JR連合組織部長 慶島 譲治

三月一日一四時四六分頃に発生した東日本大震災は、津波、原発事故も引き起こす戦後最悪の災害となり、人的・物的に甚大な被害をもたらした。JR連合では、組合員全員の無事が確認されたが、家族や家屋等に大きな被害が及んでいる。

被害があまりにも大きく、かつ広域にわたっていることや、原発事故による放射能問題が予断を許さない状況にあることから、生活再建と地域復興への取り組みは、相当な長期戦となることが想定されている。JR連合は、震災翌日の一二日に災害対応本部を設置し、各単組の支援を得ながら、被災を受けた当該のJR東日本ユニオン盛岡・仙台・水戸地方本部の組合員、家族に対する救援の取り組みを行ってきた。

こうしたなか、連合は被災地に対する緊急救援ボランティア活動を構成組織および地方連合会との協力・連携により取り組むことを決定し、三月三十一日に第一陣が岩手、宮城、福島各県に出発した。JR連合は、四月五日に開催した第一回執行委員会、連合救援ボランティア活動に積極的に参加していくことを確認し、現在まで一週間交代で、毎回三名の団員を派遣してきている。今後とも、労働組合の社会的役割に鑑み、被災者の生活再建にむけ微力ながらも支援の輪を拡げていくこととする。

現地ですぐにいただいた感謝の言葉は大切な財産

JR西労組中央本部・青年女性委員会委員長 堂屋敷 光

二〇一一春季生活闘争のヤマ場を前にした、三月一日一四時四六分に発生した東日本大震災。発生時は事務所でテレビを見ていましたが、画面に映し出される光景は、この世のものとは思えない大惨事だと感じたことを鮮明に覚えています。JR西労組は翌日に「東北地方太平洋沖地震支援対策委員会」を設置し、現在までに支援物資の購入・搬送や支援カンパなど、JR連合と連携して取り組んできました。

一九九五年に発生した阪神淡路大震災のときは、多方面から多くのご支援をいただいたことを先輩たちから聞いて

ていましたし、今度はこちらが復興・復興に向けた支援活動に全力を挙げることで、自分にも何かできることはないかと考え、連合の災害支援ボランティアに参加しました。

私が行ってきたのは宮城県・東松島。想像を絶する被災状態のなか、現地では瓦礫やヘドロの撤去といった作業を、微力ながらも精一杯行なってきました。災害支援ボランティアに参加して、現地の方々からいただいた感謝の言葉や多くの差し入れは、私の大切な財産となりました。



連合の仲間たちと被災者宅のヘドロやガレキの片付けを行う

継続的なボランティア活動に支援と協力を

JR東海ユニオン新幹線地方本部 相磯 博道

東日本大震災で被災された方々を支援するため、JR連合の代表三名で四月末から八日間の日程で連合災害ボラ

ンティアに参加してきました。私たちの担当エリアは宮城県東松島市で、作業の多くは私有地内の「泥出し」でした。

この地域は、震災当日に二メートル近くの津波が押し寄せ、波が引いたあとに、いわゆる「ヘドロ」が大量に堆積していました。市内の道路や学校などのヘドロは自治体と自衛隊が処理しますが、私有地内は基本的に個人で片付けることになっています。しかし、個人で片付けられるような量と重さではなく、さらにご高齢の方のみでお住まいのお宅も多いため、ボランティアの手助けが必要不可欠であり、現地市民からのニーズは非常に高いものがありました。作業活動をした六日間で約二〇軒のお宅で泥出しを主としたさまざまな作業を行ない、被災された方々から感謝の言葉を数多くいただきました。

連合は、本年九月頃まで継続的にこの支援活動をつづける予定ですが、現地では震災から五カ月が経った現在でも、多くの被災者がボランティアの手助けを求めています。JR連合もこの取り組みに全面的に協力し、継続的にボランティアを派遣していきますので、引き続き皆様のご支援とご協力を、私からも願います。



被災者宅で、床下の堆積したヘドロを撤去する

この経験を今後の人生に活かしていきたい

JR四国労組愛媛支部 鬼塚 章徳

五月二十五日～六月三日にかけて、仙台をベースキャンプに宮城県多賀城市、亘理町でボランティア活動に参加しました。自ら手を挙げたとはいえ、

知らない土地で、知らない人たちと一緒に活動していけるのか、ネガティブに考えていましたが、道中で参加者の皆さんと話をしているうちに不安は解消され、さあやるぞという気持ちが高ぶってきました。

現地での活動は、三勤・一休・三勤の日程で、前半は多賀城市宮内、後半は亘理町の住宅地で、主に側溝の泥出し作業を行いました。側溝の泥出しから始まり、いっばいに溜まった泥出し、土のう詰め、フタ閉めと、結構な重労働でした。

最終日まで大変な作業の連続でしたが、無事すべての作業を終えることができ、ホッとするとともに、ものすごく達成感がありました。そして、これと一緒にやってきたメンバーともお別れかと思うと、ちょっぴり寂しくもありました。

この一週間で自分がやってきたことは、ただボランティア活動をしただけでなく、被災地を直に見たこと、普段はなかなか会えない人たちと生活を共にしたこと、東北の人たちの温かさに触れたこと、すべてが一生忘れるこ

とできない自分の財産になりました。今回経験したことを、これからの人生に活かしていきたいと思います。



側溝のふたを上げて泥出し作業を行う



JR東日本ユニオンとの合同対策会議



昼食をとりながら、しばしボランティアの仲間たちと語り合う

復興への道のりは遠く、 支援者へのニーズも増えていく

JR九州労組福岡地本 花田 祐希

被災地に行つて、私がいちばん

感じたことは、被災地域がとても
広大で、復興までにどのくらいの
時間がかかるのか想像もつかない、
ということでした。テレビの
画面で見つたように、畑の中に船が
打ち上げられていたり、あちこち
にへドロに埋もれた車が散乱し、
津波で破壊された家々の瓦礫の山
が果てしなくつづいているので
す。

私たちが担当させていただいた
地区は、宮城県の亘理町という沿
岸部から二キロほどのところで、
作業内容は津波により溜まった民
家の庭の泥出し、または側溝のへ
ドロ出しなどでした。作業時間は
朝の10時から昼休憩（一二時か
ら一三時）を挟んで一五時までと、
それほど長くはないのですが、震
災から二カ月以上が経過し、泥が
固まって取り出すのに苦労した
り、慣れない作業に戸惑ったりと、
かなりの疲労もありました。

しかし、現地の方々から差し入
れをいただいたり、「ありがとう」
という言葉もいただいたりするた
びに元気をもらい、その疲れもす
つ飛び、作業をつづけることがで

きました。

私たちが亘理町のボランティア
センターに立ち寄ったとき、「今
日もたくさんの方が来てくれた」
と地元の方々がうれしそうに言っ
ておられました。現地の方々が
すれば、震災から二カ月以上が経
ちますが、「まだまだ被災地のこ
とと忘れないでほしい」という気持
ちが強いことを実感しました。

自衛隊や地元の行政だけでは背
負いきれない、被災者の日常生活
に密接する問題が、まだまだたく
さんありますし、その問題を解決
するには相当な時間が必要です。
連合ボランティアのように、多く
の人数を定期的に出しつづけるこ
とが、とても大事だと感じました。
復興までの道のりは遠く、ボラ
ンティアへのニーズもまだまだ増
えていくと思われまふ。今後多く
くの連合に集う仲間の皆さんに参
加していただき、その一翼を担っ
ていただきたいと思います。今回、
現地に派遣していただき、たいへ
んいい経験をさせていただきました。



覆われたヘドロを掘り起こし、畑をつくる。子どもたちがヒマワリの種を植えるという

ヒマワリの大輪の花を咲かせよう、 早期復興を祈る

JR北労組・自動車支部 佐藤 哲也

今回、私たちは岩手県の陸前高田市で作業を行いました。テレビなどの報道で現状はわかっているつもりでしたが、「絶句」とはこのことをいうのだと実感しました。

JRやグループ会社に携わる社員にとって、他社とはいえ、線路が拉げ、瓦礫のほかに何もない状況を目の前にし、胸が詰まりました。

被災地での作業内容は瓦礫の撤去でした。撤去するということは「無」を作り出すことで、まったくの「無」になってしまふことへの戸惑いも覚えましたが、新たな街をつくる復興のお手伝いとして、真剣に、そして一つずつ心をこめて撤去作業を行なっていました。現代では人力だけで行なうという作業はめったにないことですが、スピードはなくとも着実に作業は進んでいきました。

その他、湧き水の小川の整備、流れ込む側溝のヘドロ清掃、水溜りの排水、田畑の復旧、期間中にこのような作業にも従事しました。

現地では、連合ボランティアの一定の人数の提供と継続した取り組み、そしてその働きぶりに大きな期待が寄せられており、その一員として作業ができたことは、私にとって

の誇りです。また、地域の皆さんが、あんなにも素直に、自分の苦しみを隠しつつ「ありがとう」を言ってくれる姿に胸がいっぱいになりました。

最後に行った畑の復旧では、私たちが整備復旧したその場所に、作物を植えるのではなく、復興のシンボルとして小学生がヒマワリを植えるとのこと。 「瓦礫に花をさかせましょう」とはこのことでしょうか。「花さか爺さん」ならぬ「花さかボランティア」となったことを嬉しく思いました。早期復興を祈るとともに、八月には立派なヒマワリが太陽に向かって凛と咲く姿を祈らずにいられません。

長い一週間でもあり、あつというまの時間でもありました。体力的には厳しい面もありましたが、被災者・被災地との触れ合いなど、かけがえない経験と仲間を創ることができ、ふだんは忙しさに追われ忘れていた「人と人との信頼関係」を被災者の皆さんに思い出させていた気がします。



大津波で何もかも流された被災地の1日も早い復興を願う

東北の復興は日本の復興、 みんなであつなごろう

JR四国労組 中野 泰彦

私は、六月一九日から六月二七日まで、岩手県花巻市東和をベースキャンプに、岩手県陸前高田市を活動エリアとする連合救援ボランティアに参加しました。まず、連合本部で結団式・出発式を終え、七時間ほどかけてベースキャンプに到着。地震の影響で高速道路はデコボコしている箇所があり、屋根にブルーシートのかかった家屋もありました。

陸前高田市での活動内容は、津波で家を流された跡地に畑を作ることと、瓦礫撤去が主な作業でした。畑には、子どもたちがヒマワリを植え育てるようです。畑を作るとはいっても、土壌が粘土質であったり、ガラスの破片が混ざっており、怪我をしないように気をつけながら、ガラスや石を取り除きました。

私たちのグループは、JR連合・自治労・航空連合の計二九名の仲間です。畑作りに奮闘しました。その結果、三日間で三カ所の畑を完成させることができました。

ヒマワリが花を咲かせた姿を見たいものです。瓦礫撤去は、いろいろな瓦礫を大まかに、分別しながら、

人の手でできる範囲で撤去しました。重機があれば……と思いつながら、黙々と作業をこなしました。

畑や、瓦礫撤去中には、思い出の品物や、写真なども多数出てきました。早く持ち主や、身内の方に届きますようにと祈らずにはおれませんでした。最終日は雨の中、溝に溜まった瓦礫や土砂を取り除きました。

今回の活動は、微力にすぎない活動だったと思います。しかし、活動をしてきた仲間全員が、達成感を感じると同時に、復興のためにさらに力になりたいという気持ちになったのではないのでしょうか！

今回のボランティアを通じて、自然の強さ、人間の弱さ、仲間の大切さ、思いやりを知りました。これからの人生、人のために少しずつでも、自分の時間を使っていきたいと思えます。自分だけを考えて生きる小さな人間から成長したいと思えます。そして、復興した岩手県を再び訪れたいと思います。

東北の復興は日本の復興です！みんなであつなごり、がんばっていきましょう。